業に関心をもち、積極的に参加して下さることである。

一九八四年一一月八日

I・ウォーラースティン

ウォーラースティン著、川北稔訳"史的システムとしての資本主義"(岩波書店(岩波文庫)2022年7月)

はじめに

本書を執筆するについては、さしずめ相前後して生じた二つの事情が、直接の動機となった。すなわち、一九八〇年の秋、チエリ・パコ Thierry Paquot から、かれがパリで編集しているシリーズに小著を寄せてほしいといわれたのが、そのひとつである。パコの腹づもりでは、「資本主義」をテーマとしたいということであった。そこで、私としては原則として書かせてもらう意志はあるが、テーマは「史的システム(ヒストリカル・キャピタリズム)としての資本主義」[1]にしたい、と返事した。

私の印象では、資本主義については、マルクス主義者や政治上の左翼の人びとによってあまりにも多くのことが書かれてきたが、にもかかわらず、そうした著作には、たいてい次の二つの欠陥のいずれかが認められるように思える。すなわち、ひとつの欠陥は、資本主義の本質(エッセンス)とみなされるものの定義からはじめ、ついでそれがいろいろな場所、いろいろな時代において、どれくらい発展したかをみようとする、基本的に理論的・演

ウォーラーステイン著"史的システムとしての資本主義"

資本主義にとって重要な意味をもつ合理化の過程をすすめようとすると、この合理化を実践する専門家からなる中間層、たとえば官僚、技術者、科学者、教育者などをつくり出すことが必要になった。技術も社会システムも複雑になってきただけに、この階層が十分大きくなっていることが必須条件であったし、そればかりか時の経過に伴ってどんどん拡大させてゆくことも不可欠であった。この階層を維持するために使われた資金は、全地球的余剰から引き出されたのだが、たてまえとしては企業家や国家が負担したというかたちをとった。したがって、初歩的ではあるが根本的でもあるこのような意味において、こうした世界的分業の幹部層はブルジョワジーの一部なのであり、経済的余剰の分け前にあずかる権利があるというかれらの主張は、二〇世紀に入って「人的資本（キャピタル）」という概念がつくられて、ぴったりのイデオロギー形態を与えられた。こうした幹部層は、世帯の相続財産として相伝すべきほんらいの意味の資本はあまり持っていないから、自分の子供たちが、将来の有利な地位を保障する教育コースに優先的に入れられるようにすることで、成功を確かなものにしようと努めてきた。この優先権は便宜上、学力というかたちで表示され、狭く解釈された「機会の均等」という概念によって正当化できると考えられてきたのである。

こうして、科学的な文化こそは、世界中の資本蓄積者の最愛の法典となった。それはまず第一に、かれら自身の行為と、それによってかれらが特別の報酬を得ていることの両方を正当化するのに役立った。それはまた、技術革新を促進し、生産効率の改善に障害となるものは何であれ、厳しく取り除くことを正当とするのに役立ったし、すべての人間に利益を与えるはず――すぐにというわけではなくても、究極的には――と考えられたある種の進歩をもたらしもした。

しかし、科学的な文化は、たんなる合理化だけを意味するものではなかった。それはまた、必要とされた制度や構造に属する多様な幹部層の社会化の一形態でもあった。労働者にとってはそうはいえないのだが、幹部層にとってはこれがいわば共通の言語となったわけで、その結果、上流階級の階級としての結束を固め、幹部層のうちでもさもなければ叛乱に走りそうな部分が、実際に叛乱の指導者となる可能性ないし程度を弱める一手段となったのである。そのうえ、この科学的文化は、こうした幹部層を再生産する、柔軟性に富んだ機構ともなった。つまり、科学的文化は、かつては「才能に基づく自由競争 la carrière ouverte aux talents」と呼ばれ、いまでは「能力主義社会（メリットクラシー）」として知られている概念にぴったり適合したのである。社会的文化は、全体としての労働力配置の

ウォーラーステイン著"史的システムとしての資本主義"

ハイアラキーを脅かすことなく、個人の流動性を保障しうるような枠組みを生み出した。というより、能力主義の社会は、既存の労働力のハイアラキーをむしろ強化したのだともいえよう。最後に、作戦としての能力主義とイデオロギーとしての科学的文化とは、史的システムとしての資本主義の底流となっている諸作用を人びとに気づかせないように被い隠すヴェールともなった。科学的な活動の合理性を徹底的に強調することで、あくなき資本蓄積の不合理性が被い隠されたのである。

表面的には、普遍主義と人種主義とはまったく矛盾した教義であるとまでは言わないにしても、奇妙な組み合わせにはみえよう。一方は開放的なのに、他方は閉鎖的であり、一方は平等化を主張しているのに、他方は両極化を狙うものである。一方は理性的な議論を呼びかけているのに、他方は偏見を吹き込むものである。しかし、この二つの教義は、史的システムとしての資本主義の発展とときを同じくしてひろがり、普及したものである以上、両者は結構両立しえたのかもしれないという観点から詳しく検討してみるべきであろう。

普遍主義には、どこかひとの気を惹くところがあった。それは自然にひろがり、発展したイデオロギーではなく、世界的・歴史的システムとしての資本主義において経済と

政治の実権を握ってきた人びとによってひろめられたものである。普遍主義は、強者から弱者への贈り物としてこの世界にもたらされたのだ。「われ、ギリシア人を恐る。たとえかれらが贈り物をたずさえてこようとも！」(3)である。しかもこの場合には、贈り物自体のなかに、人種差別が隠されていたといえる。というのは、普遍主義というこの贈り物をされた側は、次のような二者択一を迫られたからである。すなわち、この贈り物を受け取ることによって、知的実力のハイアラキーにおいて自らが劣位にあることを認めるか、さもなければこの贈り物を拒絶するか、いずれかの方法を選ばなければならなかったのである。しかし、後者の途は、それを使えば将来、現実の不平等な権力状況を逆転させられるかもしれない恰好の武器を入手する機会を、自ら放棄することを意味した。

新たに特権階級に組み込まれつつあった幹部層でさえ、普遍主義の呼びかけについては決断がつかず、熱狂的にこれを信奉したいという気持ちと、その中にひそんでいる傲慢な人種差別に対する反感からこれを拒否したい気持ちとのあいだで、揺れ動いたのも不思議ではない。こうした愛憎相半ばする感情は、「ルネサンス」の名を冠せられた多くの文化運動によって表現された。ルネサンスという言葉自体は世界中至るところで使われてきたが、いずれの場合も、こうしたどっちつかずの感情を表わしたものである。

ウォーラーステイン著"史的システムとしての資本主義"

二〇世紀に入るとともに提唱されはじめた、アヌアール・アブデル＝マレクのいう「文明化計画」[5]が、とくに一九六〇年代以降、猛烈に力を強めるようになった。「土着の代替物」という新語は、古臭い普遍主義をめざす文化ナショナリズムの命題の言いかえにすぎないと受け取られることが多かったが、逆に、この命題には認識論的にまったく新しい内容があると考えた人びともいた。というのは、「文明化計画」の問題がもち出されたことで、そもそも超歴史的真理などというものが実在するか否かという問題がむしかえされたからである。たしかに、史的システムとしての資本主義のもとでの権力の実態や経済の規範を反映した形態の真理が、全地球的にもてはやされ、普及してしまっている。このことが紛れもない事実であることは、すでに検討した。しかし、この形態の真理なるものを探したからといって、現下の史的システムの崩壊過程をみるうえで、いかほどの光を投げかけてくれようか。あくなき資本蓄積を基礎とする史的システムに代わって、どんな代替物がありうるのか、という問題に対しても、こんな形態の真理の探究が役に立つといえるだろうか。問題はそこにあるのだ。

〔「土着の代替物」をベースとする〕この本質的に新しい形態の文化レジスタンスには、物理的な基礎もあった。世界中のいろいろな反システム運動が次々と民衆動員をかけた

結果、ときがたつにつれて、経済的にも政治的にもこのシステムが機能してゆくのに大して意味のない人びとをまで動員せざるをえなくなった。つまり、結局はどこまでいっても、このシステム内で蓄積された余剰の分け前にあずかれそうにもない人びとまでが動員されたのである。と同時に、こういう運動自体が次々と非神話化され、その内部に含まれる普遍主義イデオロギーの再生を難しくしてもきた。その結果、これらの運動は、運動自体の前提に疑いをさしはさむような人びとにも、どんどん開放されることになってしまったのである。一八五〇年から一九五〇年までの世界の反システム運動の構成員を、一九五〇年以降のそれと対比すると、後者では周辺地域の人びと、女性、「少数派」集団――定義は多様だろうが――に属する人びと、労働者のなかでも熟練度がもっとも低く、最低の報酬をしか得ていない階層の者などが、どんどん増加していることに気づく。世界全体でいってもそうだし、各国の国内をみてもそういえる。また、運動の全構成員についても、その指導者層に限ってみても、同じことがいえよう。運動の社会的基盤のこうした移動は、世界中の反システム運動の文化的・イデオロギー的傾向をも変えずにはおかなかったのである。

以上、ひとつの史的システムとして、資本主義が実際のところどのように作動してき

れに先行したすべての労働過程から、いくらかずつでも利潤をもぎ取ろうと必死になるからである。この争いが、一定の時間と空間においては需給バランスによって決着されることは間違いないのだが、決してそれだけでもない。というのは、第一に、むろん、需給関係は独占体がかける抑制によって操作される、という事実がある。独占体の暗躍は例外的な現象というよりは、常態的なことである。第二には、売り手は垂直的統合によって、価格を動かすことができた。「売り手」と「買い手」が事実上、結局同一の企業（ファーム）として統合されてしまうと、商品の価格は財務事情その他を考えて、勝手に決めることもできる。このようにして決められた価格は、需給バランスの反映などとはまったくいえない。しかも、「垂直的統合」は、「水平的」な独占と同じく、決して珍しいものではない。そのとくに顕著な実例、たとえば、一六世紀から一八世紀にかけて存在した特許会社や一九世紀の大商会、二〇世紀の多国籍企業などは、よく知られていよう。こうした企業はいずれもグローバルな組織になっており、ひとつの商品連鎖にかんして、できるだけ多くの環をとり込もうとしたものである。しかし、このような大規模なものとは違って、もっと小規模な垂直的統合、たとえば何かひとつの商品連鎖のごく少数の環――ときによっては、たった二つの環――だけを統合したものの方が、さらに広汎に

普及していたともいえる。したがって、思い切って次のように言ってもそれほど言いすぎではない、と思われる。すなわち、史的システムとしての資本主義にあっては、「市場」という商品連鎖の結節点があって、そこでは売り手と買い手がはっきり区別でき、両者は互いに対峙するといったかたちよりは、両者が垂直に統合されているかたちの方が、統計的にいえば常態であった、と。

ところで、商品連鎖は地理的にも、あらゆる方向にデタラメにむかっているわけではない。かりに、すべての商品連鎖を地図の上に図示することができたとすると、中心へむかう強い傾向があることがわかろう。つまり、その出発点はいろいろだが、その到達点は狭い地域に集中する傾向にあったのだ。言いかえると、商品連鎖の多くは、「資本主義的世界経済」の周辺部から中心、ないし中核地域へむかう傾向にあった。経験的な事実としては、このことを否定することはまずできまい。したがって、本当の問題は、なぜこういうことになったのか、という点にある。商品連鎖について語ることは、社会的分業の拡大について語ることである。社会的分業は、資本主義の歴史的発展につれて、機能的にも地理的にもどんどん拡大してきたのだが、同時にますます高度なハイアラキー〔ヒエラルヒー〕を構成するようにもなった。こうして、生産諸過程の構造において、

ウォーラーステイン著"史的システムとしての資本主義"

史的システムとしての資本主義のもとで、もっとも入念に練りあげられ、そのもっとも重要な支柱のひとつとなってきたのが、この第三の帰結、すなわち、制度としての人種差別(レイシズム)(2)である。ここでいう人種差別とは、資本主義に先行する諸システムにおいてもみられた排外主義(ゼノフォビア)のことではまったくない。排外主義というのは、文字通り「よそ者」への恐怖であった。これに対して、史的システムとしての資本主義における人種差別とは、「よそ者」とは関係がない。まったくその逆なのだ。人種差別とは、資本主義というひとつの経済構造のなかで、労働者のいろいろな集団が相互に関係をもたざるをえなくなってゆく場合の、その関係のあり方そのもののことであった。要するに人種差別とは、労働者の階層化ときわめて不公平な分配とを正当化するためのイデオロギー装置であった。それはまた、民族集団と労働力配置の高い相関性を一貫して維持する効果をもつ一連の習慣と結びついたイデオロギー的主張のことである。各民族集団の遺伝学的および(または)永く続いてきた「文化的」特徴こそが、資本主義というこの経済構造のなかで各集団がそれぞれ違った位置を占めている主要な原因だというのが、このイデオロギー的主張の柱である。しかし、実際には、ふつうある集団が特定の経済活動にかんして他の集団より「優れている」という信念が成立するのは、その集団の労働力としての

位置づけが決まってしまった後のことであって、それ以前のことではなかったのである。かりにそうでないケースがあるとしても、その場合も人種差別の思想は、たんなる時間的な前後関係をすなわち因果関係だと思い込むことによって成立してきたものである。経済的・政治的に抑圧されている人びとは、文化的にも「劣っている」からそうなのだと言われてきた。しかし、実際には、何らかの理由で経済のハイアラキーの中心が移動すると、社会的ハイアラキーの中心もまた、それに従って移動する傾向がみられた。(むろん、二つの変化のあいだに時間のずれはあった。というのは、既存の社会的枠組みの影響を払拭するには、ふつう一、二世代はかかったからである。)

人種差別の意識は、不平等を正当化する万能のイデオロギーとして作用してきた。しかし、ことはそれだけでもなかった。それはまた、諸集団を社会化し、「(世界)経済」のなかに位置づける役割をも果たしてきたのである。こうしてつくりあげられた態度——偏見、日常生活で公然と行なわれる差別行為——が、それぞれの世帯や民族集団のなかで個々人はどんな行動をとるのがふさわしいか、正当であるかを決めるのに役立った。人種差別の意識は、性差別の意識と同じように、自己抑圧的イデオロギーとして機能し、自己の欲望を型にはめ、ひどく制限されたものにしてしまったのである。